

● 高澤良一 第十二句集 暮津

● 一月―三月

あらまあのこゑに吞まるゝ初筑波
初雪をはたけり鳥の発つやうに
降り出して脇目もふらぬ雪となり
降る雪の意地を失くして水雪に
つままない雪が小雨になるなんて
怪人二十面相枯木の合間より
植込みにしゃらんしゃらんと初みぞれ
背焙れば叩くが如し年の火は
初刷を寢床に引き込み読めるなり
こんな日がいつまで続く初詣
しるこより雑煮齡といふことか
初晴れにひとつ体操でもせんか
古亀の池を見渡す初景色
晚酌に子持ち昆布かこりやいいや
日を遍く正月の松優れたり
二日から甲羅干しせる池の亀
亀の首二日の空へ差し伸べて
だいそれた初夢をもう見ること無し
初売のすずらん通りころりんしゃん
紙幣きつ出す音四日のキャッシュディスプレインサー
参道に見るべきものは初雀
餅に飽きバリリとやりぬクラッカー
三ヶ日おだやか四日風吹いて
蘇鉄の実手にして戻る初詣
大蘇鉄とは大らかな恵方寺
初夢は尿意に断たれ跡かた無し
コンビニの繭玉一寸つつきみぬ
昇天をまぬがれゐたり日向ぼこ
風出入り四日の旅行代理店

けんちん汁伝はる寺の総枯木
通り過ぐ木々が陰しく見ゆ大寒
谷戸尽し鎌倉に聞く笹子かな
日延ばしにせぬこと大事冬雀
羽搏ちては凍ることなき夫婦鶴
何やかや云ひては海鼠に手を出しぬ
実時の文庫跡地梅早し
最上川べりに捨てられ古竹瓮
力学の原理に適ふスキーせよ
焚火して何だかゆとりのやうなもの
日向ぼこ長身瘦軀折り畳み
えらさうに聞こゆる咳が出てしまふ
火桶より火桶の見ゆる牡丹園
三箇所に火桶設え牡丹園
遠近の牡丹に目遣り火桶に手
一塵も止めぬ鴛鴦の身だしなみ
鴛鴦映す水の最も美しき季
酢豚酸し正月料理に慣れし口
荒ぶ世「国芳 曉斎なんでもこいッ展だ！」展の春をどっこい曉斎展
曉斎の拳骨啖ふ新春展
留守居して残り福めくみかん剥く
雀らも群れをつくりて正月す
元朝の煙草を買ひにボテボテ着
松過ぎの洗濯物に差す薄日
思考力鈍る厚着はせんでおこ
初日影取り込むソーラーハウスかな
句を敲き敲き歩きぬ水っ漬
新春の蹴球魂激突す
獵犬のごとく切り込み初ゴール
萱見え十日戎の寺はそこ
初戎乾びし風が吹きにけり

福笹に当り矢紛れなかりけり
福笹の大福帳が風に舞ひ
偽小判出回る世にして初戎
福笹に吊らるゝもののおもしろや
真つ赤か十日戎の日暮れ雲
寒茜けふの一切了はらせて
寒ム空は承知只々歩くのみ
大塔宮を目指せる水っ洩
青木の実神域しんと澄みわたり
寒禽の潜めり護良親王廟
梅早し紅葉が谷やっといふところ
梅を見に人出ぬうちの瑞泉寺
ともすれば消え入りさうな冬桜
梅咲いて方代無心を乞ふた寺
初商量り売りせる紹興酒
段葛破魔矢と破魔矢すれ違ふ
寄り道大塔宮の官幣中社の梅早し
厄詣帰りの飯店すぶ古老肉食たぶ
銀髪に破魔矢いとよく映えにけり
初吟行鉛筆逗子小坪もて指す洋上富士
丹沢に雪うなばらにうねる浪
椿落つ小坪の蟹の横這い径
雲菟むところ三日の風の不二
おてんと様通して畑の梅咲ける
寒鯉は黎明の色つと動く
左義長を渚に待てる水っ洩
逗子消防第七分団とんど守る
妻の首すくめどほしよ爆竹に
爆竹の今か今かがバンと来ぬ
顔そむけどほしとんどの火の壁に
福達磨燃ゆる火中に何念ず

飾焚き白くふすぼる福だるま
眼が痒くなりて左義長果つるかな
左義長へ消防団員トビ担ぎ
左義長の火懸けの役は干支の子ら
左義長の藁灰渚に張りつきて
鳶口が何本も出でどんど焼き
竹鳴るは節破る音どんど焼き
年の鐘撞く音色にも人間味
ぶるといふ音して藪に鷓止まる
水差しに水満ちゆける音も寒
酷寒と蛇口ひねればさう聞こゆ
成人の日の諸星の華やげる
寒明けとふんぎりつけるやうに云ふ
猫がまだ己押さへて寒の日々
日向ぼこよいしょと起てば目がさまよひ
冬の蠅見直す素早き翅使ひ
乾燥諸焙れば月の隕石孔^{ルナ}
何たること大寒の酒切らすとは^{妻へ}
寒中を咲き通す花物好きや
硬直し国道ゆけば霜の声
大寒の夜を閉づビロード地のカーテン
湯屋板間厚着剥がすにてこずれり
寒曉の強き新聞掌に重る^{こわ}
寒晴れに正体晒すものばかり
おお寒むと躰こすりて起き出しぬ
電気毛布先づ強そのあと適温に
古電気毛布温度に斑のあり
寒海苔を肴に酒はまだ飲むぞ
頭上を雀ひゆんひゆん鸞替日和かな^{亀戸天満宮}
大島紬でんと着込みて初天神
鸞替や破格の鸞が先づ売れて

ひょうきんな目をした鸞の替えらるる
懐に滑り込ませぬ木彫鸞

菅公にゆかりの諸々初天神

太鼓橋こぞりわたれる初天神

これみんな鸞替を待つ人の列

鸞替の列の後尾はここですか

納め鸞大小よくも並べたり

携帯の懐中鸞も売られをり

控えある巫女一並び天神花

国産マツチ創始者 清水誠の碑
ボウボウと枯れ木国産マツチの碑

よこじゅっけんがわ
横十間川に日が射し芦枯らす

初天神戻りの藤いろ紙袋

湯島天神女坂下うぐひす来

神田明神
青木の実つやつや銭形平次の碑

一月の川一月の谷
一月のその句を褒める向きもある

水底の木の葉にも年巡り来て

寒蜩少し音を上げ煮らるるか

風邪の身の何處かひくひく起ち上がる

潔き起床が凡て冬百日

膝さすり寒さをこそぎ落とす妻

小松屋石材店
界限で一、二の容姿石屋の梅

亡き主の目利きのよくて石屋の梅

鼻紙を使ふ妻見てさては風邪

如月の簡に過ぎたる見舞状

心字池隅から隅まで氷るとは

孫の手が何處にも無くて鳴雪忌

妙本寺
しろがねに著莪は睦月の日を返し

日の永しラジオは禿げを話題にし

平潟湾
ある時は吹雪くが如く春鷗

球根を植え込みし掌の皺みゐて

お茶の間を彩どるものに雛あられ

